

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷六十四第

行發日一月五年三十和昭

## 論叢

貨幣と利子……………文學博士 高田保馬

支那農業の片影……………法學博士 財部靜治

ソロキンの<sup>社會的</sup>過程形式論の評價……………文學博士 米田庄太郎

貨幣の本質とその價值……………商學士 中山伊知郎

## 時論

物價騰貴と消費節約……………經濟學博士 谷口吉彥

## 研究

再保險形態の究極的發展……………經濟學士 佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場……………經濟學士 中谷實

ダンピングの理論……………經濟學士 岡倉伯士

## 說苑

幕末の上海貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

差額地代と限界生産力說……………經濟學士 上村鎮威

## 附錄

雜報・外國雜誌論題

(禁轉載)

## ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價

——社會的文化的變動の形式(四)——

米田庄太郎

(一) ウォームの社會進化形式論と夫れの批判(昭和十二年十二月號掲載)

(二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

I、ソロキンの社會的文化的過程形式論の概要(前々號及び前號掲載)

II、ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價

### (二) ソロキンの社會的文化的過程形式論と夫れの評價

II、ソロキンの社會的文化的過程形式論の評價

(1) ソロキンの社會的文化的過程の概念の規定の評價

ソロキンは前々號(1)「社會的文化的過程の規定」の中に述べし如く、彼が「社會的及び文化的動學」に於て用ひて居る意味での過程一般の概念を、先づ一般的に規定して、「過程とは時の進行中に於ける、一の與へられたる論理的主体の運動或は變更或は變形或は轉化或は進化の何れの種類をも、要するに空間上の地位に於ける變化であ

るか、又は量的或は質的諸方面の變更であるかを問はず、總て何れの變化をも意味するものである」と述べて居る。されば彼は社會的文化的過程を直ちに社會的文化的變化或は變動と同一視し、彼が社會的文化的過程と云ふは、即ち社會的文化的變動を意味するものであることが學ばれる。私は嚴密に考察する場合には、ウォームが社會進化を夫れの原動力と過程と結果との三方面に區別して考察して居る様に、(本論文「ウォームの社會進化形式論と夫れの批判」參考)總て社會的文化的變動に就ては、夫れの原動力と過程と結果との三方面を區別して考察することは、科學的研究の精確を期する爲めに肝要であると思ふ。併し此處では此の問題に就て論ずる暇はなく、且つ社會的文化的變動の中心的事實は夫れの過程であることは否まれないから、社會的文化的變動即ち社會的文化的過程と見做して置いて、ソロキンの社會的文化的過程の概念の規定を評價することとする。

抑々近代社會學が、始めから如何に動學的或は動態的見地を重要視して居たかは、コントの歴史哲學的社會學や、スペンサーの進化論的社會學によりて、明かに學ばれると思ふ。そうして其後社會學はヤハリ一般に、主として動態的見地から研究されて居たのである。もつとも社會及び文化の靜學的或は靜態的研究は、決して無視されて居たのではない。否な之を大に重要視する人々も少なくなかつた。又社會の靜態とは、つまり社會の進動或は動態の終極狀態或は理想狀態を意味するものであると解し、そうして社會の現實な狀態即ち動態を科學的に研究すると共に、社會の靜態を哲學的或は政策學的に考究する人々もあつた。併し何れにしても、社會及び文化の動態が社會學の主題と認められ、かくて動學的見地が重要視され、靜態的研究は寧ろ動學的の研究の準備に外ならないものゝ如くに、考へられて居たと思はれる。そうして此の事は、近代社會學は社會的文化的の大變動の時代に

生まれ、且つ生長したものであると云ふ事情に照らして考へると、敢て怪むに足らぬことが覺られる。かくて社會學は社會的大變動の時代の産物であるとか、大に變動しつゝある時代の學問的自覺であるとか、云はれて居るのである。但し大體上現世紀に入りてより、歐米諸國に於て一時社會及び文化の靜學的的研究が、一般に重要視されて居たことがあるが、併し間もなく以前にもまして動學的見地が重要視されて來たのである。例へば獨逸に於ては、現世紀の初期から現象學が大に勢力を振ふに至つて、其の影響によりて、同國の社會學或は社會哲學は靜學的見地を重要視して居たが、併し世界大戰争後の同國の社會狀態は、再び動學的見地を大に重要視するに至らめた。此の事はマツクス・シェラーの社會學或は社會哲學の發達を考究すると。興味深く了解されると思ふが、要するに彼は始めは現象學的に社會及び文化を考察し、靜學的見地を重要視して居たが、世界大戰争後は一轉して大に動學的見地を重要視するに至つたのである。又米國にありても、現世紀に入りてより、社會學の研究は行動主義心理學の發達の影響を受けて一時靜學的見地を重要視するに至つたが、併し其後文化社會學が勃興し來り、(米國文化社會學の發達の事情に就ては、本雜誌昭和五年九月號及び十月號の拙稿「米國文化社會學」を參考されし) 今や以前にもまして動學的見地が重要視されて居ると思はれる。そうして此の事は、ソロキンが彼の最近の大著作を「社會的及び文化的動學」と題して居ることや、ハウスが一昨年公にせる「社會學の發達」House, The Development of Sociology, 1936 によりても推察されると思ふ。甚だ簡單ながら右に述べし處によりても學ばれる如く、近代社會學に於ては、動態研究或は動學的見地は始めから大に重要視されて居たのであるから、社會的文化的變動の中心としての、或は之れと直ちに同一視される、社會的文化的過程は社會學の甚だ重要な、一の中心的問題であることは明かであつて、かくて夫れ概念は早く

から、包括的に又精確に規定されて居る可き筈である。然るに實際に於てはそうでない。社會的文化的過程の概念は、今尙ほ粗雑にしか規定されて居ない。少なくとも今日までの處では、何れの社會學者も自己の特に重要視する方面を偏重する、偏狹な規定を與へて居るだけであつて、まだ總ての方面を公平に包括する精確な規定を與へて居る人はないと思はれる。私は早くから此の點に注目して居たのであるが、併し私自身の見解から見て、夫れよりも一層根本的に重要であると思はれる他の諸問題の研究に専ら力を注いで居たが爲め、又今尙ほ注いで居る爲めに此の問題の研究に力を注ぐことの出來ないのを遺憾として居る。さればソロキンが其の最近著に於て、特に此の問題をとり上げて詳して論究して居るのを見て、大なる興味を以て其の所論を精讀したのである。

ソロキンは過程一般の概念、及び夫れに準じて社會的文化的過程の概念を、如何に包括的に又精確に規定しようとして居るかは、本誌前々號に掲載せる本論文の部分に於て述べて置いたが、此處に之を評價するに當つて、先づ其の要點を極簡単に指示して置くことが、讀者の了解の爲めに便宜であらうと思ふ。要するに彼は先づ過程一般の概念を一般的に規定して、「過程とは時の進行中に於ける、一の與へられたる論理的主體の……：總て何れの變化をも意味するものである」ことを述べたる後、次に彼が過程一般の本質的四要素と認めるもの、即ち過程の單位、つまり變動しつゝある或は過程中にある論理的主体と、時間關係と、空間關係と、方向との四者を一々吟味し、殊に方向に就ては、更に之を時間的、空間的、量的及び質的方向の四部類に區別して考察し、又方向の「向き」の差異を重要視して居る、次に彼は過程の單獨性或は一度性、及び再起性或は反復性のもろくの形式及び度合を論究して、絶對的な單獨的過程と、只時間に於てのみ再起的反復的な過程と、只空間に於てのみ再起的

反復的な過程と、時間及び空間の兩者に於て共に再起的反復的な過程との四形態を區別し、そうして特に社會的文化的過程に就ては、夫れの單獨性或は一度性を大に強調する見解、即ち歴史は決して繰り返さず、常に新しき或物であると主張する處の、西南獨逸派の歴史的文化科學方法論の根本的一原理として立てられて居る見解にして、彼が單獨論的概念と稱するものと、社會的文化的過程の再起反復性を専ら重要視する一般の社會學者の見解とを、適當に調和し總合しようとして企だてゝ居る。終りに彼は過程の句切り及び脈動に就て論述して居ることも亦、社會的文化的過程の概念を出來るだけ包括的に又精確に規定する爲めに、甚だ重要なものである。

今ソロキンの社會的文化的過程の概念の規定を考察すると、夫れは是れまでまだ何人も嘗つて企だてなかつたほど、包括的な又精確なものであることが、明らかに承認されるのである。今日まで吾々に與へられて居る社會的文化的過程の概念は、一般に何れかの方面を偏重する偏狹なものにして、ソロキンの規定ほど總ての方面を公平に包括して、且つ精確に規定して居るものは、一もないと思はれる。然らば吾々は彼の規定を其の儘に承認してよいかと云ふに、先づ包括的と云ふ點に就ては、私は少なくとも今日の處、夫れ以上を望む必要はないと思ふ。と云ふのは、何れの現實な具體的な社會的文化的變動を研究するに當つても、彼の規定中に列擧されて居る總ての方面に互つて、一々考察することは甚だ困難であると思はれるほど、彼の規定は既に包括的であるからである。少なくとも今日の處、社會的文化的變動の具體的研究の實際上の可能性から見れば、彼の規定は既に理想的に完全であると認めてもよいと思はれる。併し精確と云ふ點に於ては、尙ほ不充分な方面が若干見出される。殊に彼が新たに構成される可きものとして、大に重要視して居る社會的時間及び社會的空間の二概念に於ては、彼の

規定はまた餘程不精確であると思はれる。そうして私は其等の二概念に就て更に精確な規定を作るとは、今後社會的文化的變動の研究を益々精確にする爲めに、肝要であると思へて居る。それで其等の二概念に就て、此處で少し詳しく論述したいと思ふて居たが、最早其の暇がなくなつたから、只極簡単に一言するだけに止め、他日特に一論文を書いて見たいと思ふ。

私は千八百九十八年に公にされたタールドの「社會論理學」修正第二版（タールドの三部作の一にして第一版は千八百九十五年出版）を、翌千八百九十九年に閱讀した際、同書第二章中に學問的よりは寧ろ比喩的に述べられて居る事から暗示を得て、社會的時間及び空間に關して興味を感じ始めて以來、ツェルケム及び彼の一派の社會學者が研究せる原始人民の空間及び時間の概念即ち本質的に社會的に規定されて居る空間及び時間の概念や、ベルグソンの形而上學的時の概念や、ジューメル（Zimmern）の歴史の時の概念及び認識論的距離説や、社會的距離の概念や、更にハイデッガーの「存在及び時間」に於ける存在學的時間性及び空間性の概念などを順次に學んで、純量的或は純量的な物理學的或は天文學的空間及び時間の概念と區別されて質的なものであるが、しかも形而上學的或は存在學的不是なく、社會學的或は社會的である處の、新しき空間及び時間の概念の構成が、自然科學に對立する科學の他の一部類としての、文化科學或は社會科學の論理的構造を確立する爲めに、肝要な一問題であることを痛切に感じて來たのである。併しまだ夫れの研究に力を注ぐ餘裕を得ずして、其の儘にすごして居るのであるから、近頃ソロキンが其の諸著作の中に、社會的時間及び空間の重要性を強調されて居るのを見て、大に同氏の研究に期待して居るのである。

ソロキンが社會的文化的過程の研究に於て、新たに社會的文化的時間の概念を構成することが、如何に重要であると思へて居るかは、本誌前々號に於ける彼の「社會的文化的過程の概念の規定」中に述べた事によりて、明かに學ばれるのである。併し彼は方法論的問題としての、社會的時間及び空間の概念の組織的論理的論究は、まだ公にされて居ない「社會的及び文化的動學」第四卷に譲つて居るから、今日の處ではまだ之を學ぶことは出來ない。

（同第四卷は其後既に公にされたかも知れぬ）但し彼の社會的時間の概念に就ては、彼が *The American Journal of Sociology* に載せた手に入れて居ない。

ology 昨年三月號に於て公にせる一論文 *Social Time: a Methodological and Functional Analysis* によりて、大體上學ぶことが出来るが、併し同論文に於て論述されて居るだけでは、社會的時間の概念が論理的には如何に精確に規定されるかを學ぶことが出来ない。又彼の云ふが如き社會的時間なるものは、如何にして一切の社會的文化的現象の研究に、一般的に適用され得るかを、了解することが出来ない。更に彼の云ふが如き社會的時間なるものは、何れの社會或は何れの時代に於ても、如何様にか天文學的である時間の概念を背景として、或は如何様にかして之れと結び附けて、考へられるにあらずは、如何にして特殊な或は特有な質的意味を有し得るかは、了解し得られないと思ふ。私は社會的時間は天文學的時間と區別されるが、しかも如何様にか天文學的である時間を背景として、或は如何様にかして之れと結び附けて、考へられることによりて、特殊な或は特有な質的意味を獲得するものであると、考へるのである。

## (2) ソロキンの社會的文化的過程の形式論の評價

ソロキンが一般的に方向の立場から見たる過程の線狀的及び非線狀的諸型と稱して居るものを。特に社會的文化的過程に適用して居る場合が、私が社會的文化的變動の形式と稱するものに該當して居るのであるから、かくて私は其等の諸型を彼の社會的文化的變動の諸形式として考察したいと思ふのである。されば私は本論文の主旨からして、其等の諸型を特にや、詳しく考察し評價したいつもりであつたが、本論文は豫想外に長くなり、本誌編輯者に御迷惑をかけて居るから、出来るだけ簡単に論述して一先づ本論文を了りたいと思ふ。

今私の解する意味にて、ソロキンの社會的文化的過程形式論が、新たに何物を貢獻して居るかを吟味し、評價

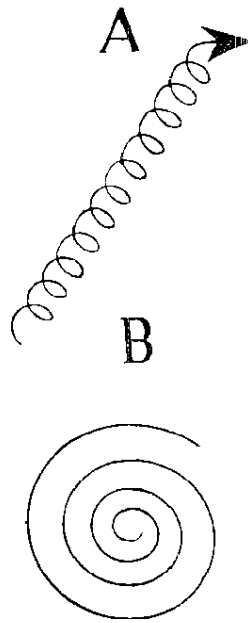


するのが、既に述べし處において察知される如く本論文の主眼であるのである。併し最早詳しく論述する暇はないから、出来るだけ簡単に述べたいと思ふが、就ては便宜上、さきに現世紀の初期に於ける總ての社會的文化的變動形式論を、總括的に考察せるものとして批判せる、ウオームの社會進化形式論と比較して、ソロキンの説を考察することとする。

ソロキンはさきに述べし如く、社會的文化的過程の諸形式を、先づ線狀型と非線狀型とに根本的に分類して居るが、非線狀型を更に循環型と變異的或は創造的反復型とに別つて居るから、全體から見ると、彼は社會的文化的過程を、根本的に線狀型と循環型と變異的或は創造的反復型との三大型に大別して居ると、見做し得られる。そして彼は更に線狀型を單線型と振動型と螺旋型と分枝型との四種に、又循環型を絶對的循環型と相對的或は比較的循環型との二種に、分つて居るのである。然るにウオームは社會進化の一切の形式は、ソロキンの言葉を借りて云へば、總て線狀的なものであると考へ、かくて一切の社會進化形式論を、直線形論と圓形論と螺旋形論との三種に大別したのである。されば外觀上から見ると、ウオームの分類は悉くソロキンの線狀型の中に包含されて仕舞ひ、そしてソロキンの分類はウオームの分類を悉く包含する上に、更に新しき二大型を設定し、かくてウオームの分類よりも遙かに廣大なるものの如くに、思はれるのである。併し兩者を詳しく比較すると、ソロキンの分類は外觀上から想像されるほど、廣大なものでないことが見出されるのである。

今兩者を詳しく比較するに當つて、先づ注目す可きはソロキンが螺旋型と稱して居るものと、ウオームが螺旋形説と稱して居るものとの差異である。言葉の上から考へると、兩者は全く同一のものを意味する様に思はれ

る。併しソロキンが螺旋と稱するは、左圖のAの如きものを意味し、ウォームが螺旋と云ふはBの如きものを意味して居るのであるから、かくて兩者は其の名稱の同一であるに拘らず、實際は相異なつて居るのである。そうしてウォームが螺旋形説と稱して居るものは、實質的には寧ろソロキンが非線狀的な相對的或は比較的循環型と稱するものに當るもの、或は類似するものであることが見出される。更にソロキンが非線狀的な絶對的循環型と



稱するものは、ウォームが直形説と稱するものに當る、或は類似するものであることが見出される。要するにソロキンが絶對的循環型及び相對的或は比較的循環型と稱するものはウォームが圓形説及び螺旋形説と稱するものと、夫れ夫れ大體上相對應して居るものである。かくてソロキンが循環型と稱するものは、本來非線狀的なものと考へられて居る點に於て、ウォームが分類せる一切の形式説と異なつて居るが、併し實質的には決して夫れとは異なる、新しき或物ではないことが、觀被されるのである。

然るにソロキンが變異的或は創造的の反復型と稱するものは、少なくとも本質的には全然新しき或物にして、此の型を新たに設定或は構成したことによりて、彼は社會的文化的變動形式論に重大な一貢獻をなして居ると思はれる。それで此處に彼の變異的或は創造的の反復型と稱するものに就て、少しく述べて置きたいと思ふ。

今ソロキンが變異的或は創造的の反復型と稱するものは、如何なるものであるかは、本誌前號に於てやゝ詳しく述べて置いたが、夫れによりて先づ學ばれることは、彼は此の型の概念によりて、社會的文化的過程或は變動の

形式に關する從來の一切の諸説を批判的に取捨し總合して、以て最とも包括的な、又最とも廣大な、かくて最とも勝れたる社會的文化的過程の形式を確立しようと、企だて、居ると云ふことである。かくて彼の變異的或は創造的復型の概念の學問的價値は、彼は此の批判的取捨及び總合を、どれほどまで正當に遂成して居るかによりて、判定さる可きである。

ソロキンの變異的或は創造的復型の概念の批判的考察に於て、先づ第一に注目す可きは、其の最とも根本的な意圖と認む可きもの、即ち社會的文化的現象の一度性アイニツリヒヤイト或は單獨性を強調する思想、彼が單獨論とか單獨論的概念とか稱するものと、社會的文化的現象の一般的復性を重要視する、社會學者間の一般的思想との批判的總合である。と云ふのは、彼は此の總合によりて變異的或は創造的復型の根本原理を確立したと、思はれるからである。但し此の根本原理に就ては、本誌前號中、ソロキンの變異的或は創造的復型が強調する第一點として述べて居る處を見られよ。

抑々ソロキンが單獨論とか單獨論的概念とか稱するもの、即ち歴史の一度性、非復性を強調する思想は、一時有名なりし西南獨逸派の歴史的文化科學方法論の根本的一原理とされて居るものにして、そうして其の歴史的文化科學方法論が、一時文化科學者或は社會科學者の間に廣く喧傳された際には、一切の文化科學或は社會科學は方法論上、總て西南獨逸派が歴史的文化科學と稱するが如きものとして、改造さる可きであると見る思想が、大に流行したのである。嚴密に考ふれば、かゝる思想の誤謬は直ちに觀破されるが、併し歴史の一度性、單獨性、非復性を強調する思想には、重大な眞理或は眞實が含まれて居ることも亦疑はれない。されば此の思想と、社

會的文化的現象の一般的反復性を重要視する思想とは、如何にして批判的に調和され、總合さる可きかは、一切の文化科學或は社會科學の重大な一の根本問題である。そうして私も西南獨逸派の歴史的文化的科學方法論が、文化科學者或は社會科學者の間に喧傳されて來た時から、社會學上早くも此の問題に注意して居たのである。併し私はソロキンの如くに、直接に社會的文化的變動或は過程の諸形式に就て、此の問題を考究して居たのでなく、一層根本的な方面即ち心と心との相互作用及び相互關係の方面に就て、此の問題を考究して居たのであるから、私の批判的總合の仕方とソロキンの批判的總合の仕方との間には、外見上では別に連絡或は關係がない様に見ゆるかも知れない。されど實質的には或は根本的には、兩者は大體一致して居るのである。されば今科學としての社會學上、直接に社會的文化的變動の形式に就て考察するに當つては、私はヤハリ大體上ソロキンの見解を承認するのである。但し夫れに就ては尙ほ種々論じたいことがあるが、其の暇はないから省いて置く。

次にソロキンが變異的或は創造的反復型の強調する第二點として述べて居ること、即ち最も多數の社會的過程の線狀的方向に於ける限界の存在を強調すると云ふことは、第一點として舉げて居る根本原理から演繹される一論結と、或は既に其の中に含蓄されて居るとも見做し得られる。そうして「此の事はつまり歴史及び最も多數の社會的過程に於ける、一の永久的な主要線狀的傾向の存在の否定を意味して居る。全體としての歴史に關しては、夫れはまだ完成されて居ないのであるから、又將來は豫見し得られないのであるから、吾々は人類が導かれつゝある何等かの持続的主要傾向及び何等かの終極點が存在することを知らないし、又知ることが出来ない」と云ふ彼の言述は、科學としての社會學の立場から見れば、承認し得られるのである。併し社會哲學の立場から見

れば、そうでないことをソロキンは覺つて居ない。是れ彼は科學としての社會學と社會哲學との區別を認めて居ないが爲めであるので、そうして其のことは彼の社會學の重大な一缺點であると思はれる。但し此の點に就ては、最後の節に於て簡單ながらとりまとめて論述する。

終りにソロキンが變異的或は創造的復型の強調する第三點として述べて居ること、即ち所謂内在的原因作用の原理、自己規制の原理を含蓄して居ると云ふことも、ヤハリ根本原理中に含まれて居るとも、又は夫れから演繹される一論結であるとも見做し得られる。夫れはつまり「統一化されたる單位に於て行はれ、一定の方向に於て進動する何れの社會的文化的過程も、此の活動其物の力によりて、過程の單位及び夫れの方向を變動させる「諸勢力」或は「諸原因」を發生するのである」こと、かくて「一の過程の何れの與へられたる方向も、夫れ自身の終りを齎らし、又他の方向によりてとり代はられるのである」ことを意味する。そうして夫れもまた科學としての社會學の立場から見れば、承認されるものであるが、併し社會哲學の立場から見ればそうでないのである。

簡單ながら以上述べし處によりて示せる如く、私はソロキンが變異的或は創造的復型と稱して創説せる、社會的文化的過程の總合的形式は、科學としての社會學の範圍内に於ける社會的文化的變動の形式の研究上、今日までに吾人に與へられて居るものの中で、比較的に最も勝れたるものであると考へるが、併し夫れと同時に、社會哲學の立場から見れば、そうは考へられない點があるのである。それで最後に此の點に就て、簡單に論述したいと思ふ。

(3) 科學としての社會學の立場及び社會哲學の立場から見たる、變異的或は創造的復型の評價

ソロキンは「社會的及び文化的動學」第一卷緒言中に、「殆んど總ての大社會學的體系は歴史哲學の一品種であり、又偉大なる歴史哲學の最も多くは、文化的變動の一社會學であるから、本書を歴史哲學と題するのがよいと考へる人があるならば、其の人がかゝる名稱を使用することには、私は決して反對しない」と云ひ、又同卷序論第四章第三節中に、彼の社會的及び文化的動學は「社會學、社會哲學、歴史哲學又は其他何れの名稱で呼ばれてもよい」と云ふて居るが、私は此等の言述によりても、彼は科學としての社會學と社會哲學との區別の重要性を、全く認めて居ないことが推察されると思ふ。尙ほ私は彼の云ふが如くに「殆んど總ての大社會學的體系」だけではなく、特に科學的であると揚言し、且つ之を大に誇りとして居る總ての社會學者の社會學も、詳しく吟味すると根本的には哲學的であるか、又は大なり小なり哲學的思索を混交して居るものであつて、純粹な科學としての社會學を建設した人は、今尙ほ一人もないかと思ふ。されば此の點に就ては、私は決して獨りソロキンのみを非難しようとするのではない、只彼もヤハリ其の一人であることを指摘するだけである。

然るに私は、此處で詳しく論述することは出来ないが、今日までの社會學、又殊に今日の社會學に於ける混亂状態は、根本的には社會學者が一般に、科學としての社會學と社會哲學とを、ハッキリ區別せずに研究して居ることを、少なくとも其の重大な一原因として生起して居ると考へ、かくて私は今後の科學としての社會學の健全な發達の爲めにも、亦社會哲學の健全な發達の爲めにも、兩者を嚴格に區別して研究することは、甚だ肝要であると信じて居る。

云ふまでもなく、科學としての社會學と社會哲學との區別は、科學と哲學との區別を基礎として確立されるものにして、そうして私を見る處によれば、本論文(一)「ウォームの社會進化形式論と夫れの批判」中に述べし如く、極簡単に云へば、「科學とは經驗的現實或は事實を経験的方法によりて研究し、相對的及び蓋然的或は確率的な知識を獲得しようとするもの、又かゝる知識

を獲得するだけで満足す可きものであるが、之れに反して哲學は科學の與へる相對的及び蓋然的知識に即して、先驗的方法或は超經驗的方法によりて、經驗的現實態或は事實の奥底に於て洞見されると認められる或は信じられる絕對的及び必然的な意味を究明し、かくて絕對的及び必然的知識を獲得しようとするものである。但し此處に私が必然的と云ふは、科學的知識の蓋然的確率であるのに對立させて、哲學的知識の特質を明示す爲めに用ひたる言葉であるが、夫れはつまり實現される可きであるとして或は實現されねばならないとして、人間が實現す可く努力せねばならないことを意味するものであるから、之を必然的と云ふよりは當爲的と云ふ方が良いかも知れない。それで私は時々當爲的と云ふ言葉をも用ひて居るのである。

私は科學と哲學とを、右に述べし如くに根本的に區別し、そうして學問的研究に於て先づ重要視す可きは、科學であると認めるのであるが、併し夫れと同時に又、哲學は科學と同等に重要視さる可きものであると考へ、かくて科學を偏重する人々の如くに、決して哲學を無視或は輕視しない。否な一定の意味に於ては、哲學を科學以上に重要視して居る。是れ人間が自覺的生活を營み、且つ之を益々發展させる爲めには、一定の絕對的指導原理を必要缺く可からざるものとするのであるが、今かゝる絕對的指導原理を學問的に基礎付け、確立するものは、即ち哲學であるからである。かくて私は社會的文化的現實態の學問的研究に於て、先づ科學としての社會學を大に重要視するが、同時に又夫れと同等に否な夫れ以上に、社會哲學を重要視するのである。

私は科學としての社會學は、經驗的な社會的文化的現實態或は現象を、經驗的方法によりて研究し、夫れの相對的及び蓋然的或は確率的な知識を獲得しようとするもの、又かゝる知識を獲得するだけで満足す可きものにして、社會哲學とは科學としての社會學の與へる處の社會的文化的現實態に關する相對的及び確率的知識に即して、先驗的方法或は超經驗的方法によりて、社會的文化的現實態の奥底に於て洞見されると認められる、或は信じられる絕對的及び必然的或は當爲的意味或は價值を究明しようとするもの、更に夫れによりて人間の自覺的な社會的文化的生活の根本的指導原理を基礎づけ、確立しようとするものである。そうして夫れが爲めには、社會哲學は一般的基本的世界觀を學問的に建設し、或は確立する一般哲學或は基本哲學に依頼せねばならぬ。かくて社會哲學は直接には一般哲學或は基本哲學を基礎として、建設されるものである。

科學としての社會學と社會哲學との根本的區別及び連絡に關する私の見解は、甚だ簡單ながら右に述べしが如きものであるが、是れよりかゝる見解に基いて、社會的文化的變動の形式の研究に於ける、科學としての社會學の立場と社會哲學の立場との差異及び連絡を論述したいと思ふのである。併し最早殆んど紙面の餘白がなくなつたから、此處では只其の主眼點だけを極簡單に述べるに止め、詳しくは他日の機會に譲る。

要するに私は社會的文化的變動の形式の研究に關しては、科學としての社會學の立場から見れば、ソロキンが變異的或は創造的復原型と稱するが如きものは、少なくとも今日の處では、さきに述べし如くに、比較的に最もも包括的な又最も勝れたるものであると認める。併し社會哲學の立場から見ると、夫れは其儘に直ちに承認されることが出来ない。社會哲學の立場から見れば、吾々は變異的或は創造的復原に於ける何れかの一定の重要な方向を、其の奥底に於て洞見される絶對的必然的或は當爲の意味或は價值によりて、如何なる限界をも有しない、決して他によりてとり代はられてはならない無限的な永久的方向、且つソロキンの云ふ意味にて、如何様にか線狀的である可き、殊に單線的或は直線的に益々上昇す可き根本方向として、哲學的世界觀的に基礎付け、かくて人間の自覺的な社會的文化的生活の絶對的指導原理を確立せねばならぬ。そうして吾々日本民族の特有の社會哲學即ち日本社會哲學に於ては、吾々は日本民族固有の又特有の永久不變なる國體の眞義を益々發揮し、益々發展させることを、日本民族の社會的文化的發達の變異的或は創造的復原中に於ける、永久の無限的である可き、又他によりて決してとり代はられてはならない根本的方向として、日本哲學的世界觀的に基礎付け、日本民族の自覺的な社會的文化的生活の絶對的指導原理として確立することを、其の最も重要な任務としなければならぬのである。